

〈研究ノート〉

釈道空短歌語彙「ひそけさ」「かそけさ」の誕生

— 『海やまのあひだ』所収「供養塔」を中心に—

中西 洋子

はじめに

釈道空（折口信夫）の短歌作品においてしばしば目にすることばに、「ひそけさ」「かそけさ」が挙げられる。これは道空短歌を形成する独特の気分をもったことばとして一般的にとらえられているものであり、第一歌集『海やまのあひだ』から最終歌集『倭をぐな』を経て「私家版自筆歌集」、「短歌拾遺」に至るほぼ全歌集

にわたって散見されるといってよい。その各歌集にみる使用例の内訳は次の通りである。単位

『海やまのあひだ』

22例（「ひそけし」11 「かそけし」11）

『春のことぶれ』

28例（「ひそけし」14 「かそけし」14）

『水の上』

19例 (「ひそけし」 9 「かそけし」 10)

『遠やまひこ』

13例 (「ひそけし」 8 「かそけし」 5)

『天地に宣る』

2例 (「ひそけし」 1 「かそけし」 1)

『倭をぐな』

8例 (「ひそけし」 3 「かそけし」 5)

『私家版自筆歌集』

2例 (「ひそけし」 1 「かそけし」 1)

『短歌拾遺』

3例 (「ひそけし」 1 「かそけし」 2)

計「ひそけし」 48例 「かそけし」 49例

(活用形も含む また重複例は除く)

こうしてみると、「ひそけし」「かそけし」両者の使用数はほとんど差がなく、また時代を追うに従ってその数は次第に少なくなっているのがわかる。これは、時節や場所、状況など歌う内容如何により、必要とされたりされなかったりした、ということだろうか。前

半歌集に多く見られ、次第に少なくなっていくことからすれば、年齢を重ねるごとに用い方が成熟し、独自の世界を拓くに至ったというのでもないようだ。全歌集の前半に集中するのは第一歌集『海やまのあひだ』と第二歌集『春のことぶれ』の二歌集であり、最も多い使用数は第二歌集であるが、本稿では初期の作品に当たる『海やまのあひだ』所収「供養塔」をとり挙げ、「ひそけさ」「かそけさ」の持つ内容や用いられ方とともに、その誕生した場面や背景を考えてみようとするものである。

一 　まず、「ひそけし」(名詞ひそけさ)「かそけし」(同・かそけさ)について、道空は次のように述べる。

「ひそけき」「ひそけし」といふ活用が、完全に備つて居つたかどうかは、私も初めから疑問にしてゐたのです。だけれども、形としては当然あつてもよい形だし、(中略) 又ないにした処で、造語といふことが御座います。(中略) 昔から優れた

文学者——私を言ふものではありません——で、造語した者は多いのです。造語も規則正しく、あるべき形を逐つてして行くなら、文学作者として当然許されてよいことなのです。^{注2}

右は旧師武島羽衣たけしまはごうもに宛てた「去七尺状」の中の一節。武島が道空の作品数首に対してことごとく批判的であることに、理論的にことばを尽くして抗議した内容である。たとえは、「むら山の松の木むらに 日はあたり、ひそけきかもよ。旅人の墓」について、武島は

一首要領の得られぬ歌である。第一、「ひそけき」など言ふ語は、存在してゐない。「ひそかに」とか「ひそやかに」といふ立派な言語があるではないか。又「ひそか」といふは、こつそりと秘密にといふ意である。旅人の墓がひそかにありとは何の意とも分からぬ。又日があたつてゐれば、中が明るくなるから、ひそかなる理由もない。旅人の墓も突然である。端書がなくては十分の了解が出來ぬ。よろしく

むら山の松の木むらに日はさせど寂しきかも
よ旅人の墓
と改むべきである。

という具合である。

武島のいう「ひそかに」について、『日本書紀』の「ひそかに」に当たる用字の中、「顧」の字を用いた部分を綿密に検証し、「ひそ」という語根が静謐を示していること、さ、めく、ひそめくが意味を失わずに続いていることなどを説き、ひそかに・ひそけくがわからぬのはどうか、と反論する。つまり、「ひそけき」ということばは存在しないとする武島に対して、それは事実であるが造語もあり得るのであり、「規則正しく、あるべき形を逐つて行くなら、文学作者として当然許されてよい」と主張して譲らず、以後歌の中に取り入れていくことになった。造語「ひそけし」はこうして生まれたのであり、「かそけし」については特に説明した箇所はないが、同様の理由によるものであったと考えてよいだろう。

ここで、造語ではない「ひそか」について確認して

おきたい。「ひそか」は形容動詞「ひそかなり」の語幹である。未然(「ひそか)なら)連用「なり(に)」「終止「なり」連体「なる」已然「なれ」命令「なれ」と活用する。『全訳古語辞典』ではその意味を、①人に知られないようにする、②公的なものを私物化する様子、③あまり知られていない様子、などとしている。またこれに関連した形容動詞「ひそやか」も、①ひそかにするさま。しのびやか。こっそり。②物の乏しいさま(広辞苑)。あるいはこの外に、①物音などが絶えてひっそりと静まっているさま。②人に知られないように静かに事を行うさま(明解国語辞典、類語例解辞典)などの意味が示されている。漢字は両者ともに「密(か)」を当てており、意味はほぼ同様とみられよう。「ひそか」、「ひそやか」については、「ひそかなる心をもりてをほりけむ。命のきはに、言ふこともなく」、「洋なかの島に越え来てひそかなり。この島人は、知らずやあらむ」、「ひそやかにぬればさびしも。たそがれの窓の夕かげ月あるに似たり」と『海やまのあひだ』に用例が認められる。

一方、「かそか」については形容詞く活用の「かそ

けし(かすけし)がみられ、意味は音・色などがかすかなさまである(広辞苑)とする。また、形容動詞「かすかなり」では『全訳古語辞典』に①ほんのりわずかだ。はつきり見えたり聞こえたりしない。いまにも消えてしまいうに弱々しい。②ひっそりともものさびしい。目立たないようす。③勢いが無い。貧弱だ。たよりなく心細い。④奥深く趣がある。幽遠だ。としており、「幽(か)微(か)」の漢字を当てている。従って「かそか」という語根はない。道空歌の「水脈ほそる／山川の洲の班ら雪。／かそかにうごく／ものこそはあれ」(『春のことぶれ』)はやはり造語であった。

こうしてみると、「ひそかなり」(ひそやかなり)と「かすかなり」「かそけし」との意味のおおよその違いは、前者が自分を含めた人の動き、振る舞いについて用いられることが多いのに対し、後者では物ごとや情景、状態などの対象についていう場合に用いられていることがわかる。しかし、用例によってはどちらとも区別のつきがたいのも認められるだろう。

二
では、道空歌における造語「ひそけさ」「かそけさ」がどのように使われているかを、『海やまのあひだ』の中にみておきたい。

先ず「ひそけさ」について、

- 1 かの子らや われに知られぬ妻とりて、生きのひそけさに わびつゝをゐむ
- 2 谷々に、家居ちりほひ ひそけさよ。山の木の間に息づく。われは
- 3 ゆき行きて、ひそけさあまる山路かな。ひとりごゝろは もの言ひにけり
- 4 はたごの土間に 餌をかふつばくらめの声 ひそけさや。人おとはせず
- 5 沢なかの木地屋の家^{キヂヤ}にゆくわれの ひそけき歩みは 誰知らめやも
- 6 邑山^{ムラ}の松の木むらに、日はあたり ひそけきかもよ。旅びとの墓
- 7 ひそかなる心をもりて をはりけむ。命のきはに、言ふこともなく

- 8 洋^{ヨウ}なかの島に越え来て ひそかなり。この島人は、知らずやあらむ
 - 9 ひそやかに あゆみをとゞむ。夜はの雪踏み行くわれと 人知らめやも
 - 10 あかときを 散るがひそけき色なりし。志摩の横野の 空色の花
 - 11 ひそやかにぬればさびしも。たそがれの窓の夕かけ 月あるに似たり
- 先ず、右の内1「生きの」、4「つばくらめの声」、5「歩み」、6「旅びとの墓」、7「心をもりて」、9「歩みをとゞむ」、11「ぬ(寝)ればさびしも」についてそれぞれ自分自身や教え子、旅人(の墓)、あるいは燕といった人間や生き物に関わって用いられているのが明らかである。また、2では「家居ちりほ」う情景にかかるとも、下句の息づくわれにかかっていると両方^もにその気分が浸透しているように思われる。3は「山路」という場所にかかっているが、初句「ゆき行きて」の気分の揺曳があり、やはり作者自身にかかわった用法と言えよう。

では、「かそけさ」についてはどうか。

- 1 蜚の子のかづき苦しみ 吐ける息を、旅にし
聞けば、かそけくありけり
- 2 若松のみどりいきる、山はらに、わが足おと
の いともかそけき
- 3 誰びとに われ憚りて、もの言はむ。かそけ
き家に、山びと、をり
- 4 人も 馬も 道ゆきつかれ死ににけり。旅寝
かさなるほどのかそけさ
- 5 ゆきつきて 道にたふる、生き物のかそけき
墓は、草つ、みたり
- 6 山のうへに、かそけく人は住みにけり。道く
だり来る心はなごめり
- 7 湍を過ぎて、淵によどめる波のおも。かそけ
き音も なくなりにけり
- 8 この心 悔ゆとか言はも。ひとりの おやを
かそけく 死なせたるかも
- 9 青空は、暫時曇る。軒ふかくこもらふ人の
息のかそけさ

- 10 如月の雪の かそけきわがはぎや。白き光り
に 目をこらしつ、
 - 11 龔ふる雑木のなかに、歛（み）うてる いとゞ 女夫（ドクト）
の唄の かそけき
- この中で1「旅にし聞けば」、2「わが足おとの」、7「音も」、9「息の」、11「女夫（メイト）の唄の」などからは多く自分自身や人間の、あるいは波など自然界の音にかかわって用いられているのがよくわかる。3と5ではそれぞれ「家」や「生き物の墓」の状態に即しての表現であろう。4は人も馬もそして自分も含めた、旅寝の時間の長さにかかわる用法であり、6は人の住まう様子について用いられている。8は母親を死なせた、その死なせ方に関わった用い方である。残る10は、如月の雪の光りで見える（そのように白い）自分の脛の状態を表現したのだろうか、よく理解出来ない一首である。
- このように見てくると、「ひそけさ」「かそけさ」共にその共通点もみられながら、用いられ方によっては、さまざまに複雑な意味合いを含んでいることが推察できるのである。そして注目すべきことは、その舞台が

両者とも多くは一人旅の途上において生み出されたことばであった点である。道空が造語を主張したのもこのことと無関係ではけしなかつた。

三

『海やまのあひだ』所収「供養塔」五首は旅の途上に生まれた代表的な連作の一つであった。武島が批判的に採り上げた先の一首はこの中に含まれる。

供養塔

数多い馬塚の中に、ま新しい馬頭観音の
石塔婆の立つてゐるのは、あはれである。
又殆、峠毎に、旅死シにの墓がある。中に
は、業病の姿を家から隠して、死ぬるま
での旅に出た人のなどもある。

人も 馬も 道ゆきつかれ死に、けり。旅寝かさ
なるほどのかそけさ

道に死ぬる馬は、仏となりにけり。行きとゞまら
む旅ならなくに

邑山ムラの松の木むらに、日はあたり ひそけきかも
よ。旅びとの墓

ひそかなる心をもりて をはりけむ。命のきはに、
言ふこともなく

ゆきつきて 道にたふる、生き物のかそけき墓
は、草つ、みたり

詞書きの長さに比べると作品は五首と少ないが、この中にそれぞれ二例ずつ「ひそけき（かもよ）」「ひそかなる（心）」と、「旅寝かさなるほどの）かそけさ」「かそけき（墓）」とが歌い込まれていることに注目したい。

「自歌自注」（以後「自注」）には、この一連の生ま
れたいきさつや時期、場所、背景などと共に長い自注
がみられるまよ。それによると、これは大正十一年の作で
あり、発表は同十二年であった。関東大地震がしずまっ
た頃、既にアララギを退いていた古泉千樫の勧めがあ
り、同十三年雑誌「日光」創刊に加わって、「供養塔」
以下の連作を発表した。入会したのはアララギから遠
のいた大正十年頃すより作歌活動を休んでおり、その寂

しさと自分の歌の減びることの悲しさを救う為であった。「供養塔」以下の連作にはそうした悲劇的な精神が胸にあり、それがはからずも歌を出直す機会になったのだという。

さらに、「ひそけさ」「かそけさ」について、「日光」同人の数に入ってから心軽く歌に合う様になったとい、「自由」に羈旅の哀感を歌ひ出した。でも、さすがに「さびし」「かなし」を露骨に言ふのを憚った。「かそけさ」「ひそけさ」なる語に特殊の内容を持たさうとしたのもそのためである」と、旅の哀感に対する表現への追求心をのぞかせている。

『海やまのあひだ』は明治三十七年（一九〇四）頃より大正十四年（一九二五、逍空十七歳より三十八歳）までの作品六九一首を逆年順に収録する。従つて、「供養塔」以後の連作とは「木地屋の家」十五首、翌年（大13）の「山住み」五首、「夜」六首、「気多川」十一首、「蟹の村」十三首、巻頭の「島山」十四首、という制作順になろう。大正十一年の「遠州奥領家」八首は「白鳥」（大11・1創刊國學院大学生による）に発表。さらに「日光」創刊号（大13年4月）には「奥遠州」十三首が発

表された。この中に小題「供養塔」の記載はなく、詞書きと作品五首につづき、「木地屋の家」の小題及び八首を掲載している。同三号（六月）には、「山住み」十二首、及び関東大震災後に試みた四行詩「砂けぶり」を発表。また、同四号（七月）には「木地屋の家二」十一首、同七号（十月）には「海山のあひだ」二十二首が同誌に発表されており、作歌活動並びに研究活動（『日本文学の発生』、『呪言の展開』など）の充実した再スタートが確認できるのである。

「自注」によると、「これは、美濃の中津・岩村から、信州の浪合・新野、更に三河・遠州の山間を渡つてゐる間の作物の一部が、かういふ機会を得て、世に出ることになったのである」と、連作の生まれた場所を述べている。年譜には、大正九年（一九二〇）七月松本市教育会にて講演のちとあり、十七日以降二五日に至り静岡に出るといふ、山間における民間伝承採訪の一人旅であった。従つて先の「遠州奥領家」（大11）もこのコースに含まれることになろう。

辿っていく山間の道の至る処にある行路病者の古い、新しい墓、仆れた馬を祀る馬頭観音の石塔婆、こ

うしたのを見つると、「私の悲しみは、故人の悲しみがよみがへつて来るもの、如く、その間つねに新しく覚えた」、また、「なるほどかうも、行路の旅に人間も馬も倒れ死んでしまふものだった事を知る。それほどにも感じた事のないありふれた事に、これ程深く、いと遙かなものを心に感受するのは、長い旅寝を重ねる間の極度の心しづまりによるものであらう」と「自注」に述懐する。

二〇一九年三月、筆者も『海やまのあひだ』所収「夜」の舞台である海という、矢矧川に沿った山峡の村を訪ねたことがある。道空が岩村から徒歩で入った場所である。「夜」に登場する狂った翁の家を探してしばらく歩いたが、真昼でも薄暗い道のあちこちには馬頭観音や非業の死を遂げた少年の塚、水神を祀る碑、苔に覆われた何の塚とも墓とも知れない自然石が道しるべのように置かれていて、ささやかな供花が枯れたままになつていたので今も鮮やかに覚えている。時折車が通り過ぎる外は人影のほとんどない道であった。この道を歩いた道空の旅の時間をほんの僅かに偲んだのであった。

道空とその歌を「黒衣の歌人」と評したのは北原白秋であったが、この連作は大正十三年創刊の「日光」に発表した「奥遠州」と題する十三首に「木地屋」の連作とともに含まれている。その中で、「供養塔」「木地屋」の中の歌を挙げながら次のようにいう。

……かうした歌の「ひそけさ」「かそけさ」がもつ不思議な寂寥感にぶつかつて、未だ曾て見てないひとりの人の歌風を見た。この沈潜こそ容易なものではないと知覚されたのである。写生によつて「人生の深奥所」に達するといふ赤彦のそれとちがつて、尋常人の鍛錬によつて得られぬある本質の「眼」や「五体」が寧ろ不気味なほどに底から光つて響いて来るのである。

つまり、「ひそけさ」「かそけさ」から感知されるものを不思議な寂寥感であり、容易ならざる沈潜ととらえた。それは鍛錬などでは得られぬ持つて生まれた本質的なものであるというのである。また、「万葉といへば、黒人の境地を出発点として涯しない一つの道に

踏み出したかの観がある」と述べ、

この特異にして幽鬼のやうな経験者は、幽かに息づいては山澤をわたり、ひそかにと息を凝らしては林草の間をたづねてゆく。

と続ける。「ひそけさ」「かそけさ」を含む旅の世界に對して、その独特の風貌とともに白秋の感性が鋭く呼応した評言であった。

道空の山旅とはどのようなものであったか。早川孝太郎「折口さんと探訪旅行」^{註10}によると、

……その時の折口さんの旅は、その後幾度も聞いたが、随分と無茶な冒険に近いものであった。信濃の新野（下伊那郡）から、地藏峠を越えて、坂部に下つて居る、もちろん唯の一人である。この道は昔の遠州街道だが、その長い険しい路は実際に歩いた者でないと判らない。

……初めての旅としては、思ひ切つた路を選んだものであった。この紀行は幾つかの歌となつて載

つて居るが、何かしらその昔の蕉門一派の行脚を思はせるものがある。あの人々は旅は修行であつたが、折口さんの場合でも一種の学問的鍛鍊を思はせる処がある。

と述べるように、初めての旅にしては経路の過酷さや計画などがいかに無謀であつたかが、現代のわれわれにも想像に難くない。早川が道空の旅を評したことば「学問的鍛鍊」には、尋常ではない精神的な烈しさを感じさせもする。大正九、十、十一年の頃は講演や探訪旅行に加え、執筆活動も精神的に行つていた時期であつたことは、年譜などによつてすでに知られている。早川はさらに「供養塔」の中の「人も馬も」の歌を挙げて次のように続ける。

険しい山道、馬方の死、馬頭観音、美濃の楮皮商人の遭難など、陰惨な話も数々きいた。旅の感傷が滲み出て居る。この地帯は今でこそ（中略）人の往来も繁くなつたが、大正時代は、全く時代から隔絶した別天地であつた。それだけに外部から

は入る者を固く拒んで居た。

このように「旅の感傷の滲み出」る背景には、右のような数々の身をもつて見聞きした現場体験があった。そして、それをけして自分一人だけの一過性のこととして受け取らず、また詠わなかつた点にこそ、「供養塔」のもつ独特の意味を見いだせるのではないだろうか。先に触れた「自注」の、「私の悲しみは、故人の悲しみがよみがへつて来るもの、如く、その間つねに新しく覚えた」という箇所である。私個人の悲しみは、実は何代にもわたる昔の人々の悲しみに繋がっているものとするところが、いにしえの人々との時空を超えた「悲しみ」の共有といつてもよいだろう。「零時日記Ⅱ」にも、山また山の奥在所に踏み入ってみると、行者、巡礼、高野聖などの行路死者の記憶を留めた場所があったといい、さうした道の隈々に佇んで、「白い着物の男女の後姿を目にした杖の尖や、鈴の音の耳に響くを感じた」と記している。「ひそけさ」¹¹「かそけさ」はこのような旅の中から醸成された用語であった。

四

前後するが先行文献に触れておきたい。

独自の領域を歌の上に追求しようとした作者の苦心は、その用語にも示されている。「かそけし」「ひそけし」などいうことがそれぞれである。普通ならば、「かなし」とか「さびし」とかいうことばで言う所である。然し、過去において殆んど文学の上にとりあげられることもなく、山河の中に吸われるようにして果てた、名も無くことばも無き人々の、寂寥極まりない生をいうために、作者は深くつきつめた内容をこれらのことばに籠めていたのである。

(岡野弘彦『釋道空』共著千勝重次¹²)

この「供養塔」の連作は、詞書きによつて詩意が補われる。「人も 馬も 路ゆきつかれ死に、けり」では、それが現在なのか過去なのか分からない。いわんや道ばたの供養塔を見て詠んだものとは分らない。おそらくは太古から、今日まで、旅死人の絶えなかつた長い道の歴史を想像しているの

である。そしてそれは、いま苦しいひとりの旅をしている自分にまで、ずつとつながっているのだ。だから下句は、一転して自分が旅寝を重ねて来た時間の回顧なのである。(山本健吉『釋道空』) ……それは「かそけさ」や「ひそけさ」の実体が、即物的な動機から誘因されたものでなく、得体の知れぬなにか根源的な生の深部から、じわじわと生じてくる種のものであることに対する諸家達の、いわば一種の畏怖に起因している、と断言できると思う。

(岩田正『釋道空』)
 下句の「旅寝重なるほどの かそけさ」は、詠み手の長旅の鋭敏になった「心しずまり」を意味するという。詠み手の心情としてとらえることを最上とするが、その手前の解釈に、「死ぬるまでの旅に出た人」の心情を、この下句に見るのは許されないことだろうか。

(畠山英治『道空短歌の読み』^{註15})

「ひそけし」「かそけし」ということばには、行路死者の人々の寂寥極まりない生をいうための、深くつき

つめた内容が籠もっているのだ、とする岡野説。太古から今日まで旅死人の絶えなかつた長い道の歴史を想像し、自分の苦しい一人旅はその歴史につながっている。故に(「かそけさ」を含む)下句は旅寝を重ねて来た時間の回顧である、という山本説。「ひそけさ」「かそけさ」の実体が、得体の知れぬなにか根源的な生の深部から、じわじわと生じてくる種のものである、と述べる岩田説。さらに、下句は詠み手の鋭敏になった「心のしずまり」としてまずとらえながら、「死ぬるまでの旅に出た人」の心情をもここに認めようとする、畠山説。

このように「ひそけさ」「かそけさ」とそれを用いた歌の解釋には、諸説ともに深い読み込みの跡が推察される。その一つに「人も 馬も く」の下句「ほどの(かそけさ)」が挙げられよう。これは道空自身も拘った語であり、「日光」(大15年1月号)における「海山のあひだ」の合評でも問題にされたのであった。諸氏の指摘もある。たとえば、

やや観念的かと思わせる上句だが、「ほどの」に

至って、何ものかを強く噛み締めるかの韻きへと変じて、読み終わった時、きわめて深々とした韻きの中にいることを知る。が、「ほどの」の解釈は難しい。「旅寝を重ねるにしたがって」等と解しても、「かそけさ」と直結しない。現代語としての「の」と違って、直後に深い休止・間を作るからだ。(略^{注16})

「合評」(先掲「日光」)ですでに白秋が「ほどの」への疑義を述べている。道空の拘泥も、白秋にうながされたところがあるにちがいない。少し理屈っぽい感じを与えることもたしかなのだが、しかしこの語の微妙な間が一首を歌い手自身の幽暗な情念に誘導する鍵語^{注17}でもある。

右に挙げた両者、成瀬有、一ノ関忠人が共通して注目するのは「ほどの」の「ほど」の意味とともに、「の」とそれに続く「こま空けの「間」であろう。前者は、現代語の「の」と違って「直後に深い休止・間」をつくる、といい、後者は「この語の微妙な間が一首を歌い手自身の幽暗な情念に誘導する鍵語」とみたのであ

る。両者の、こうしたことばを探り探り追求する部分には、山本説の「旅寝を重ねて来た時間の回顧」と共通する要素をうかがい知ることができるとはでないか。そして、岡野説、岩田説、島山説もそれぞれことばの表現は異なりながら、「ひそけさ」「かそけさ」の内包する気分はさほど変わらないと考えてよいのではなからうか。

『海やまのあひだ』における諸要素として、香川進のとらえた悲劇精神を挙げながら、作品や成長期に起因する欠乏感・孤独感を指摘したのは千勝重次であった^{注18}。先に引用したが、「私の悲しみは、故人の悲しみがよみがえつて来るもの、如く、その間つねに新しく覚えた。」と自注にいうことばには、「存在も知られぬ生を終わった人々への共感の出所」はここにある、と述べている。「ひそけさ」「かそけさ」の生まれる背後には、道空が抱えるこうした欠乏感・孤独感の存在も不可欠の要素であった。「アララギ」を退会し「日光」に加わる間の、作歌活動の途切れようとして寂寥感を味わっていた頃でもあったのだ。

『海やまのあひだ』における「ひそけさ」「かそけさ」

の誕生には、述べてきたように困難を極めた幾日もの山越え、沢歩きの民間伝承採訪の一人旅なくしては考えられなかったのである。道空の旅はさらに雪まつり、花祭りの採訪へと分け入っていく。「ひそけさ」「かそけさ」はその旅の入り口で獲得した歌境であった。「春のことぶれ」以降、この「ひそけさ」「かそけさ」の用語はどのように展開されるのか、については次の機会を待ちたい。

【注】

- 1 折口信夫・岡野弘彦編『釈道空全歌集』角川ソフィア文庫 KADOKAWA二〇一六年六月
- 2 『折口信夫全集』第25巻「去七尺状」
- 3 同26巻「自歌自注」
- 4 『折口信夫手帖』國學院大學折口信夫古代研究所編一九八七年十月
- 注1 『釈道空全歌集』所収著者略年譜
- 5 『釈道空集』追ひ書き』『折口信夫全集』第25巻
- 6 北原白秋「黒衣の歌びと」『折口信夫全集』第21巻月報第3号には、「日光」創刊号発表の「奥遠州」13首
- 7 注4『折口信夫手帖』
- 8 中西洋子「夜」の川原」歌誌「相聞」第69号「相聞の会」二〇二〇年3月
- 9 注6に同じ
- 10 早川孝太郎「折口さんと採訪旅行」『折口信夫全集』第15巻月報第4号
- 11 「零時日記Ⅱ」『折口信夫全集』第28巻
- 12 岡野弘彦（共著千勝重次）『釋道空』シリーズ近代短歌・人と作品4桜楓社出版一九六一年11月
- 13 山本健吉『釋道空』角川選書59角川書店一九七二年1月
- 14 岩田正『釋道空』紀伊國屋新書A-61紀伊國屋書店一九七二年1月
- 15 島山英治『共同研究―道空百歌輪講Ⅰ―道空短歌の読み方』歌誌「白鳥」別冊 編集発行人成瀬有二〇〇六年3月
- 16 成瀬有 注13に同じ
- 17 一ノ関忠人 注13に同じ

18 香川進「釋道空―悲劇精神について」歌誌『地中海』
第9巻第3号

19 千勝重次（共著岡野弘彦）注10に同じ

※引用した資料の旧漢字は常用漢字に改めた。